

伝統の和紙に新風を

帽子にバッグ、トレーや小皿、文庫本カバー、ネクタイ、日傘の張り地……。これら、わ遊の作品は、布ではなく、横手市十文字町睦合むつあいに古くから伝わる十文字和紙で作られている。



※表紙撮影協力/フレンチレストラン千秋亭(庭園)



「え？これが紙でできているの？」作品を手にした人の多くが、こんな感想を口にする。

帽子は、軽くふんわりとして、さらさらとした手触り。丈夫で通気性にも優れている。さらに、表面にコンニャクのりかきしほ(※)や柿渋を塗り、防水性も高めている。「素材がいいから面白い作品ができる。十文字和紙の魅力にすっかり惚れ込んでしまった」と、わ遊の渡辺弘子さん。

江戸中期、睦合集落で盛んに行われていた和紙づくりは大正時代に数軒となり、現在は農家の佐々木清男さん(69歳)ただ一人になった。春夏秋は農業、紙すきは冬の仕事。原料となる楮こうぞを自ら栽培し、刈り込み、蒸かし、皮はぎ、寒ざらし、叩き……。こうした気が遠くなるほどの工程を経て紙をすく。200年以上受け継がれる素朴な手作業で和紙を作る。

20年ほど前、佐々木さんの工房を訪ねたことがあった渡辺さん。「なんて手間のかかる作業なのだろう」と驚きとともに、十文字和紙の風合いと素朴さ

に引かれ、以来、時々工房を訪ねるようになっていた。そして、「和紙は便せんやはがきに用いられる程度。何か別の方法で魅力を伝えられないものか」と考え出したのが、紙にしわ加工を施して作る帽子だった。さまざまな文献を読み、試行錯誤しながら、コンニャクのりや柿渋を使った防水加工にもたどり着いた。

「秋田にはこんなにも素晴らしい和紙がある。先人たちが編み出した知恵や技を絶やさぬよう、十文字和紙を活用することで伝統工芸を応援したい」

作品を世に送り出して今年で5年目。さまざまなアイデアで帽子以外にも次々と新作を発表している。軽くて丈夫、使い込むほどに味が増す十文字和紙に今なお引かれ続けている。



※コンニャクの粉を熱湯で溶いたもの。古くから和紙の補強、防水などに使われてきた

Hiroko Watanabe



手しごと和紙「わ遊」

渡辺 弘子さん

http://washi-wayu.blogspot.jp

Eメール hirowa@sea.plala.or.jp

TEL.090-7066-5066

※わ遊の作品は、那波紙店で常設展示・販売しています。

那波紙店

秋田市大町4-3-35

TEL.0120-23-4311